第26期
活動方針

社会の中で祈りの実践を

キリスト者として

「福音の体験」を届ける仕事　下川正人



ノンクリスチャンの親戚に会うと、決まって「正人のしよる仕事が、いまだによう分からん」と言われます。横文字の非営利組織、それもキリスト教関係の団体と言われてピンと来ないのも、無理はないでしょう。「ズバリ、これをやっています」と一言で説明できればまだ理解の余地がありそうですが、実際には色々な活動があるため、どうも歯切れの悪い説明になってしまいます。

しかし、ＪＥＬＡの「色々な活動」の背景には、その歴史と精神が宿っています。117年前に米国のルーテル教会の宣教師たちによって設立されたＪＥＬＡは、教会を通じた宣教はもとより、学校や福祉施設の設立・運営を通して多角的にキリストの愛を伝えてきました。時代とともに活動内容は大きく変遷してきましたが、「キリストの愛をもって社会に関わり、教会の外でも福音を体現しよう」という今のＪＥＬＡの思いの中に、創設時の灯火が燃え続けていると感じます。

私はＪＥＬＡで特に難民支援に深く携わってきました。その活動の一つは、わずかな財産で来日した難民認定申請者へ、ＪＥＬＡの所有物件を緊急住居として提供することです。入居前に実施する面接の中で、来日に至った経緯の聞き取りなどとともに、「ＪＥＬＡはキリストの愛をもって仕えるキリスト教主義の団体です」という「お断り」を伝えることになっています。様々な宗教の難民がいる中で、キリスト教団体からの支援に抵抗を感じる人がいる可能性を考慮してのことです。幸いなことに、今までこの「お断り」によって拒絶的な反応を受けたことはありません。むしろ多くの人が笑顔で受け入れ、中には「キリスト教には敬意を持っているので光栄だ」と言う人もいました。

この仕事を続ける中で、「お断り」の文言は単なる事前確認ではなく、信仰告白であり福音宣教なのだと思えてくるようになりました。難民が「キリストの愛に基づく団体が、宿のない自分を助けようとしている」と知るとき、それが個人的信仰にどう影響するかは神のみぞ知ることですが、「旅をしていたときに宿を貸し」（マタイ 25：35）という福音を生身で体験しているのは間違いないのです。このような体験こそが、ＪＥＬＡの真髄であると感じます。ＪＥＬＡの「色々な活動」は、傍目には分かりにくいかもしれませんが、そのどれもが人々に生きた福音の体験をもたらすようにと祈りながら、日々業務に取り組んでいます。

（ＪＥＬＡ職員　市ヶ谷教会員）



「るうてる食堂クレヨン」の活動を通して　恵良好恵

毎月第２・第４火曜日に開催される「るうてる食堂クレヨン」＆「いきいき健康サロン」2021年にスタートして５年目を迎えております。美味しいコーヒーコーナーもあり、地域に開かれた教会をめざして、こどもも大人も誰でも参加できます。勿論、開催するには多くの皆様の協力があっての成果、支援して下さる企業をはじめ多くの支援者に励まされ、感謝しております。

野菜に関しては主に広島市農業振興センター、地域のスーパー、パンはアンデルセン、お土産にはカルビー株式会社、明治製菓他、加えて子ども食堂を応援して下さる地域の方々よりの献品は、私達の働きを覚えての応援、とても励まされております。使い切れなかった食材は次回の為に冷凍保存しておりますが、そのためにと、遠方の信徒

社会の中で生きる

さんが贈って下さる保存用ジップロックにも感謝です。

13時のお祈りから始まり調理、配膳、かたづけ、終了の19時までボランティアは無理のない時間帯で奉仕しております。教会員をはじめ、地域の方々、園児から小・中・高・大学生、少し離れた所からも広島市のボランティア課で紹介され、「教会が主催だから安心して参加しました」というお声も聞きます。与えられたその日の材料を、皆で工夫しながらメニューを考えるのも楽しい作業です。限りある材料を前に無駄なく使い切ることに重点を置いて、話し合いながら美味しいメニューが出来上がる喜びは何よりのお恵みと感動し、とても良い勉強になっております。

近年教会も新しい信徒の方をお迎えするには社会状況も厳しく、牧師が時代に即した伝道活動を模索される時に考案された子ども食堂、ボランティアの中には、私達の会話を聞いていて、女性会の集いに参加を希望され、先日は主日礼拝にも出席されるという、とても嬉しい現象を目のあたりにしております。

89歳のおばあちゃんですが、神様の手足として働きの場を与えていただき感謝でございます。

（広島教会員）



ベタニヤホームの食支援活動を通して見えてきたもの

山内恵美

私が勤める母子生活支援施設ベタニヤホーム（東京･墨田区）は、2021年から本格的に食支援の活動を始めました。食べることは、命と直結しています。食べるものに困っている人は、他のことにも困っています。食支援を５年間続ける中で、「話を聞いてほしい」というニーズを持つ地域の母子家庭の姿も見えてきました。このように見えてきたものも含めて、ベタニヤホームの実践をご紹介します。

この食支援には、当初から３つの柱を設定していました。１つ目は施設の退所者に向けたアフターケア、２つ目は地域の母子家庭のニーズを探り必要な支援に結びつける（イコール、必要な場合には母子生活支援施設への入所につなげる）、３つ目は地域の支援ネットワーク形成でした。

アフターケアでは、食品を取りに来られなければ職員が届ける（アウトリーチ）ことが定着し、いつでも相談できる施設としての機能が強化され、活動を始める前の相談件数が年間79件だったのに対し、昨年度は624件にまで増加しました。

また、フードパントリー参加者のうち地域の母子家庭に対しておこなったアンケートの結果、20％以上の人が「話を聞いてほしい」という要望を持っていることがわかりました。そこで、パントリーでは食品を渡すだけで終わらせず、話を聞き、支援の情報を伝えること、衣類や文房具提供・美容エステ･子どもコーナーなどさまざまなメニューを提供することで、参加したお母さんや子どもたちがほっとできる居場所としても機能することを目指しています。

３つ目の柱である「地域の支援ネットワーク形成」に関しては、今まで繋がることのなかった、障害者支援事業所や地域の病院、児童館などさまざまな食支援団体と顔の見える関係を築くことができ、入所･退所母子家庭の支援にも大変役に立っています。

職員は、皆一生懸命法人･施設の理念である「隣人愛とはなにか」を考えながら、できる範囲で主の代わりにパンを届け、孤立し分断されている人の声に耳を傾け、隣人になろうとしています。そして、この活動を通して、施設としても地域の多様な母子家庭の現状や社会課題に気づかされる恵みを受けています。

これからもベタニヤホームは、「食」をきっかけにして人と繋がり、「生きること」を分かち合っていきたいと思います。

（ベタニヤホーム職員・聖パウロ教会員）

第 26 期
活動方針

次世代への信仰継承と、あらゆる世代との

町野町ログキャビンプロジェクト





写真　浜名教会員　山田征郎さん提供

2024 年 1 月 1 日、能登半島を中心に大地震が発生しました。特に奥能登の被害は甚大で多くの家が倒壊し、道路が寸断されました。

ルーテル教会は奥能登の町野町とつながりを持ち、復興を支援していくことになりました。プロジェクトでは山から木を伐り出し、自分たちの力でログキャビンを建てていくことを目的としています。代表の大石賢斉さんを中心に町民ボランティアが多数参加しています。まずは人々が集まれるカフェとしての大きめのキャビンを建設中で、この 11 月に完成予定です。ログカフェを手始めにそこからは希望があれば倒壊した個人宅の庭先に住居用のログキャビンを建設していく予定です。

「ルーテル教会の皆様には我々のプロジェクトをご支援いただき、大変心強く思っています。一筋縄ではいかないことが容易に想像できるからこそ、乗り越えたときには以前よりはるかに自力がついていることも想像できます。教会の皆様には町野の景色が変わっていく様子と共に、我々が成長していく姿も楽しみにしていただけたらと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします」

一般社団法人萬学舎　代表　大石賢斉

JELAアメリカワークキャンプ2026

ＪＥＬＡアメリカ・ワークキャンプ 2026 が 7 月下旬に開催され、現地宣教団体がミネソタ州で開催した家屋修繕のボランティアキャンプに参加した他、同州セントポールにある Como Park Lutheran Church と元宣教師のディビッド・パーソン師協力のもとホームステイも行われました。全国から中高生 16 名（うち 9 名はルーテル教会や関連施設から）が参加し、引率者として森愛さん（市ヶ谷教会）、チャプレンとして三浦慎里子牧師（みのり・岡崎教会）が同行しました。以下に感想文の一部を掲載します。全文はＪＥＬＡのＷＥＢページで公開されておりますので併せてご覧ください！

英会話と初対面の人々との協働に緊張しましたが、現地の人々は拙い英語にいつも耳を傾け、「あなたがこのグループに来てくれて嬉しい。家族がいないアメリカに 1 人で来たことは誰もができることではないよ」と温かく受け入れてくれたことに心から幸せを感じました。



（キャンプテーマの Illuminate について）自分自身が光り輝くのではなく、月が太陽の光を反射して輝くように、神様から受け取った優しさや愛を隣人にお返しすることだと思いました。そのように照らし、照らされた神様の愛はどんな闇も勝つことのできない絶対的な光であると確信できました。

公益財団法人ＪＥＬＡ
星崎ポール





宣教の分かち合いを目指して

第26期
活動方針

こどもキャンプ



８月３日から５日にかけて、ルーテル広島教会で小・中学生を対象としたこどもキャンプが開催され、小学５年生から中学２年生まで28名が参加しました。コロナ禍以降、減少していた参加者も年々増加し、今回をもって回復したと言える状況となりました。

子どもたちにとって、広島での学びは豊かなものであると同時に、衝撃的で、深く考えさせられるものだったことでしょう。けれど、難しいテーマでありながらも、子どもたちは平和について真剣に考えていました。

聖書を通して平和をどのように考えていくのか。そのことを今年は大切にしました。神が求めておられるのは、「戦争をしない」ことにとどまらず、「愛する」ことです。互いに「愛する」ことこそが教会の語る平和であり、「平和を実現する」ことにつながっていくのだと思います。

そういう意味では、初めて出会った子どもたちがすぐに打ち解け、仲良くなっていく姿の中に、「愛する」という「平和」がすでに現れていたのかもしれません。子どもたちと共に平和について学びながら、私自身も多くのことを教えられた、豊かなキャンプとなりました。

このキャンプのために様々な形でお支えくださった皆さまへの感謝とともに、報告とさせていただきます。

大江教会牧師　中島和喜



春の全国ティーンズキャンプ

３月30日（月）から４月１日（水）、東京・高尾の森わくわくビレッジにて「第33回春の全国ティーンズキャンプ」が開催。今年は「救いって思ったよりリアルかも」をテーマに、北海道から九州まで40名のティーンズとスタッフら計70名が参加しました。受難週の三日間、イエス・キリストが罪の赦しのために十字架へと歩まれた道をたどり、体験プログラムや分かち合いを通して、十字架と自分自身との関わりについて考えました。仲間との交わりを深めながら、それぞれが信仰を見つめ直す有意義な時となりました。

都南教会牧師　中島共生



今回の春キャンは、聖書のお話の劇で、誘惑に負けたり、人を批判したり、嘘をついてしまうなどの弱さを自分も持っているのだと気づかされました。分かち合いを通して多様な価値観に触れ、学びを一層深めることもできました。最後には沢山の友達に囲まれ、充実した時間を過ごすことができました。

石崎愛結（健軍教会）





私は春キャンに参加し、再会や新しい出会いに心安らぐ時間を過ごしました。一方で十字架について考える中で、自分の弱さと向き合う難しさも感じました。しかし体験を通して、十字架は苦しみだけでなく、救いと希望を示すものだと気づきました。この学びを大切にし、これからも祈りながら歩んでいきたいです。

山下倖來（玉名教会）